

# 「学ぶ」を支える 場づくりのコツ

～学習支援立ち上げハンドブック Vol.1～

NPO法人 場とつながりの研究センター





# はじめに ～学習支援を始めたいあなたへ

子どもの貧困対策として、「学習支援」に関心が集まっています。例えば、「中3 学習会」など低所得世帯の子ども向けの無料学習会は、NPO や行政が積極的に取り組んでいる様子や進学率の向上などの実績についてメディアでも取り上げられるようになり、多くの人に知られるようになってきました。学習支援によって勉強に自信がつくことで子どもが元気になりますし、その結果、家庭の雰囲気も良くなることもあります。「子ども食堂」と並び、関心を持つ人が増えていることを実感します。

最近、「子どもの貧困って聞くけど、私に貢献できることってないの?」とか、「自分の住む地域で学習支援を立ち上げたいけど、どうやって立ち上げればよいの?」という相談を受けることが増えてきました。その一方で、「勉強を教えることは苦手だから、学習支援に参加できない」と謙遜(?)される方も多く見受けられます。そのような方々のために、「学習支援を立ち上げるうえで考えたいこと」をまとめたものが本冊子です。同じ思いをもつ仲間と一緒に、わいわいおしゃべりをしながら考えてみませんか?

## 目次

<b>第1章：今、何が起きてるの?</b>	<b>P 2</b>	<b>第3章：はじめに考えておきたい7つのポイント</b>	<b>P13</b>
1.1 日本に「貧困」ってあるの?	P 3	ポイント①	P14
1.2 何に困っているの?	P 5	ポイント②	P15
1.3 「子どもの貧困」への多様なアプローチ	P 6	ポイント③	P16
1.4 国の施策はどうなってるの?	P 7	ポイント④	P18
<b>第2章：「学習支援」ってなに?</b>	<b>P 8</b>	ポイント⑤	P19
2.1 なぜ「子どもの貧困対策」に「学習支援」なのか	P 9	ポイント⑥	P20
2.2 「勉強を教える」その前に私達が考えておきたいこととは?	P10	ポイント⑦	P21
2.3 学習支援を通して、何を願っているのだろうか?	P11	<b>第4章：おわりに</b>	<b>P24</b>



日本の貧困って聞くけど、

## 第1章

# 今、何が起きてるの？

「子どもの貧困」という言葉がメディアに登場するようになりました。日本に貧困？ 子どもが貧困？？ イメージしにくいかもしれませんが、なんとなく生きづらそうにしている子どもが増えているような実感はあるかもしれません。その「生きづらさ」とは何なのでしょう。

「周りのみんなにとっては当たり前前の生活が自分だけ享受できない」という状態は、子どもにとって想像以上のダメージを与えます。まずは、日本が今どういう状況にあるのか、をきちんと把握することからはじめませんか？

# 1. 日本に「貧困」ってあるの？

「子どもの貧困」と聞いて、どのようなイメージを持ちますか？ 現代の日本では「衣食住が十分でない子」<sup>1</sup>はあまり見かけないかもしれません。しかし、趣味や習い事・ゲームなどの遊び道具・携帯電話…など、日本という社会で「普通に」家族や友人と暮らしていくにもお金がかかります。このような、生きるには十分かもしれないが周りにとって当たり前な暮らしができるのに十分なお金がない状態のことを「**相対的貧困**」<sup>2</sup>と呼んでいます。主に先進諸国における経済格差に基づく貧困といえるでしょう。

では、相対的貧困の状態にある子どもは、どれくらいいるのでしょうか？

**図表1**は、相対的貧困状態にある子どもの割合をグラフにしたものです。全国平均で16.3%の子ども、つまり40人クラスに6, 7人の子が貧困状態にあるのです。昔から一定数いたものの、近年の上昇率は目を見張るものがあります。世界と比較しても、OECD加盟34カ国のうち26番目の水準で、特にひとり親家庭の子どもの貧困率は50%を越えており、世界でワースト2位<sup>3</sup>となっています。

また、子どもの貧困を、所得だけでなく、生活必需品の有無や健康、教育、日常生活上のリスクなどから分析したユニセフのレポートがあります<sup>4</sup>。このレポートでは、子どもの幸福度の総合順位は31カ国中6番目と高かった一方で、子どもが物質的豊かさの面では21位と低い評価になりました。例えば、**図表2**は物質的豊かさの指標の1つである「子どもの剥奪率」です。年齢水準に応じて持っていて「当たり前」と思われる8品目のうち2つ以上の品目が不足している家庭の割合をまとめたものです。調査した28カ国中、日本は18位の7.8%でした。

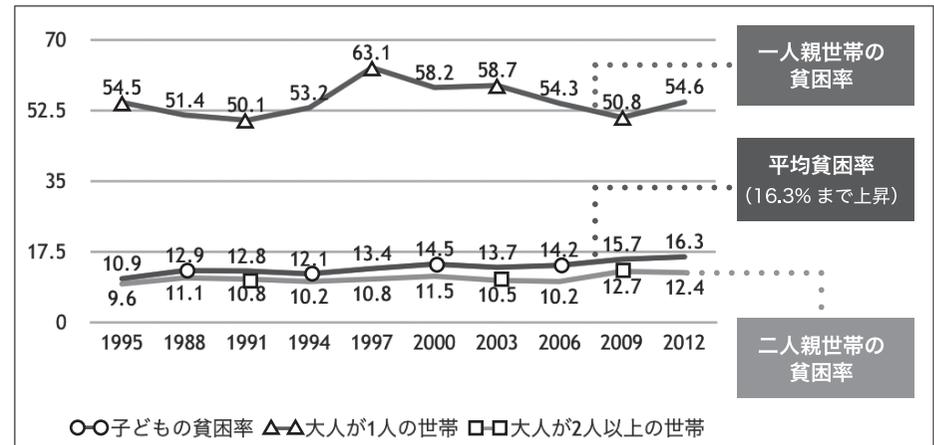
<sup>1</sup> このような「人間として最低限の生活をも営むことができないような状態」を「絶対的貧困」と呼ぶ。

<sup>2</sup> 世界協力開発機構 (OECD) の基準に基づき、等価可処分所得 (再分配後の世帯可処分所得を世帯人数で調整した所得) の中央値の半分の所得以下で生活する人の割合、で計算される。世帯人数によって異なるが、概ね毎月10万円以下の収入で生活している家庭、と言える。

<sup>3</sup> OECD(2014) Family database "Child poverty"

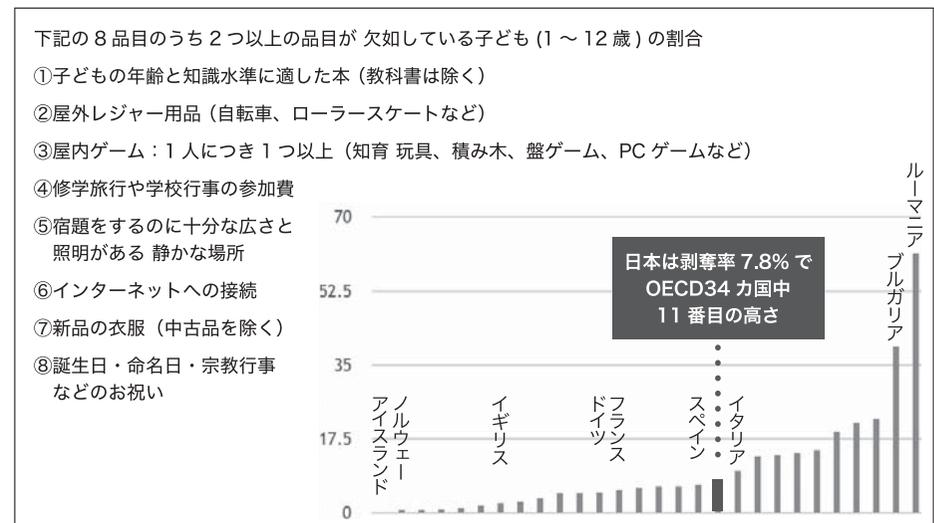
<sup>4</sup> UNICEF イノチェンティ研究所、阿部彩・竹沢純子(2013)『イノチェンティ レポートカード 11 先進国における子どもの幸福度—日本との比較特別編集版』

【図表1】相対的貧困率の推移(単位%)



(出典) 厚生労働省「国民生活基礎調査」

【図表2】子どもの剥奪率(単位%)



今、何が起きているの？  
学習支援ってなに？  
はじめて考えておきたい7つのポイント  
おわりに

# 「相対的貧困」の状態ってどれくらい大変なの??

相対的貧困状態にある家庭の子どもが約 6 人に 1 人いると言われています。そのような家庭では、家計をどのようにやりくりしているのでしょうか？右の表を使って、父、母、中学生の子ども 1 人の核家族における「1ヶ月にかかる生活費(税金・社会保険料を除く)」をシミュレーションしてみましょう。

1. **A** と **B** それぞれのケースにおいて、家計簿を作ってみましょう。
2. 他の人と見せ合って比べてみましょう。どの費目を削り、どの費目は削れませんでしたか？
3. では、相対的貧困家庭(120,000 円 / 月)の場合は、さらに何を削れば良いのでしょうか？

A. 平均家庭 (日本の平均年収より)	B. 低所得家庭 (日本の平均年収の半分)
世帯平均年収約 <b>500万円</b> (可処分所得約400万円) とすると、毎月使えるお金は <b>34万円</b> になります。	世帯平均年収約 <b>240万円</b> (可処分所得約204万円) とすると、毎月使えるお金は <b>17万円</b> になります。



## 考えるヒント

- ・ 住居費は賃貸と仮定して算出。家電や家具、消耗備品は年間総額を考慮して12で割った数を算入
- ・ 食費には家族で行く外食も含む
- ・ 衣類は日常的なもの以外にも、スーツや外出用のバッグ、アクセサリも含む
- ・ 教育進学貯金は、習い事や塾、教材や学校諸費、部活にかかる経費、学資保険も含む
- ・ 娯楽交際費は、家族旅行や帰省などの費用を含む。年間総額を考慮して12で割った額を算入
- ・ 交通で車を所持していると仮定した場合は、ローンの支払いや車検、保険なども月単位で計算

(出典) 幸重社会福祉士事務所 (URL: <http://yukishige.jp/>)

費目	A. 平均家庭	B. 低所得家庭
住宅費	円	円
食費	円	円
水光熱費	円	円
衣類	円	円
教育費・進学貯金	円	円
娯楽・交際費	円	円
通信費	円	円
交通費	円	円
医療・生命保険	円	円
貯金・その他	円	円
合計	340,000 円	170,000 円

memo

## 2. 何に困っているの？

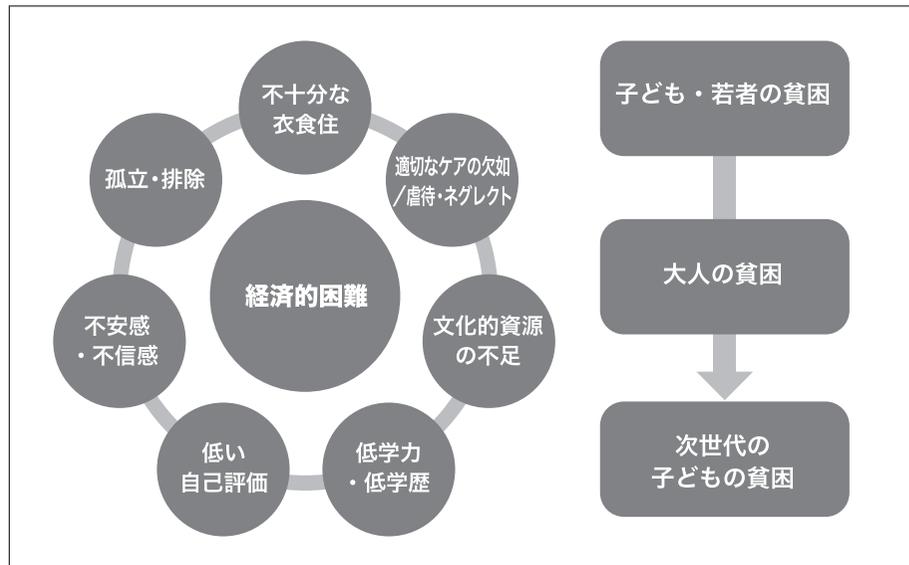
相対的貧困家庭における経済的なしんどさについて考えてきました。しかし、そうはいつでも、どこにそんな子がいるのでしょうか。そして、どんなことに困っているのでしょうか。

子どもの貧困は、経済的なしんどさをきっかけに多様な問題に広がっていく社会課題です。例えば、次のような困りごとが考えられます。

1. 経済的な困りごと	2. 家庭環境に関する困りごと
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ダブルワーク以外の収入の増やし方</li> <li>・適正な収支管理の方法がわからない</li> <li>・相談相手が見つからない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・親の病気、障害</li> <li>・ステップファミリー※</li> <li>・自覚のないDVや虐待</li> </ul> <p>※再婚や事実婚により、血縁のない親子関係や兄弟姉妹関係を含んだ家族形態のこと</p>
3. 地域や学校事情に関する困りごと	4. 情報に関する困りごと
<ul style="list-style-type: none"> <li>・大人の目が届かない</li> <li>・地域内の多様性が低い</li> <li>・いじめ、不登校、非行、学力問題</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活保護など使える制度を知らない。</li> <li>・パソコンや携帯がないと情報が届かない</li> </ul>

子ども一人ひとりによって、困りごとの種類もその背景も異なります。しかし、階層化社会が進行している現在、困りごとを抱えた子どもが大人になった後も貧困状態から脱出できず、次世代の新たな子どもの貧困を生み出す「世代間連鎖」の問題にきちんと目を向ける必要があるでしょう(図表3)

【図表3】子どもの貧困の連鎖<sup>5</sup>



### コラム：貧困対策は経済対策！

2015年12月、日本財団は「子どもの貧困が与える経済的損失が1学年ごとに4兆円に達する」というレポートを発表しました<sup>6</sup>。現在15歳の子ども約120万人のうち、貧困状態にある子ども約18万人が貧困状態を脱出した場合とできなかった場合とのシナリオを比較したところ、脱出できなかった場合の社会全体の経済損失は約2兆9000億円に達するとともに、社会保障費などで政府には約1兆1,000億円の財政負担が生じる、という内容です。したがって、子どもの貧困問題を福祉・慈善事業でなく経済対策として捉え、教育・所得格差、そして階層固定化への解消に有効な「投資的」施策が必要である、と提言しています。

<sup>5</sup> 小西祐馬 (2009) 「子どもの貧困を定義する」『子どもの貧困白書』、明石書店、p.11

<sup>6</sup> 日本財団 (2015) 「子どもの貧困の社会的損失推計 レポート」

URL : <http://www.nippon-foundation.or.jp/news/articles/2015/img/71/1.pdf> ※右側のQRコードを読み取ることでもご覧頂けます。



# 3. 「子どもの貧困」への多様なアプローチ

子どもの貧困に対して、それぞれの地域事情を反映させながら、全国各地でさまざまな取り組みがなされています。そのうちのいくつかをご紹介します。

## 1. まなぶ支援

低所得を原因として塾や習いごとに行けない子がいます。そこで、地域の人や先生の OB が中心となって、地域の公民館などを使って放課後に勉強を教える取り組みがなされています。例えば「中3 学習会」、「無料塾」などの名称で行われており、中には数十年続けてきているところもあります。

また、貧困が地域的な課題となっているエリアでは、補助金を出して運営補助をしている自治体もあります。



## 2. 食べる支援

「食」の困りごともあります。親が十分に食事を提供できないと、おかしなど栄養の偏った食べ物ばかり食べ、中には晩ごはんを食べない子もいます。そこで、地域住民が晩ごはんをまとめて作って、みんなでご飯を食べる場として「子ども食堂」を作る動きも近年活発になってきました。

実施スタイルは多様で、毎週 1 回開催しているから月に 1 回程度のところまで、1 食 100 円程度の実費を取るところから無料で行うところもあります。また、「フードバンク」や「おてらおやつクラブ」と連携して、食材の調達を工夫している事例も多くあります。



### コラム：「夕刻を支える場」の取り組み

公園では禁止事項が増えて使いにくい。習いごとをしていないと行く場所がない—放課後の子どもの居場

所」が社会的になくなりつつあります。学校や放課後児童クラブが終わってから夜にかけての時間や学校が休みの期間

## 3. 生活支援

生活困窮家庭では親のダブルワーク（仕事の掛け持ち）もあり、親が遅くまで働いていると、子どもとの関わりが十分に取れず、さまざまな体験やしつけを行っていくことがありません。そのような中、京都市での「トワイライトステイ」という先駆的な取り組みがあります（運営・NPO 法人山科醍醐こどものひろば）。放課後

に子どもが集まってきて、「遊び—食事—宿題—お風呂」までを大学生スタッフといっしょに過ごします。その過程で、さまざまなマナーや社会性、生活に必要な力を身につけていくことができるようです。



## 4. 経済的支援

日本では、進学のコストがかかりすぎます。家から遠い学校に通うならば、一人暮らしにかかる生活費も賄わなければなりません。そこで、「奨学金」を借りるケースが増えていますが、利息や返済開始時期の問題等、公的な制度としては十分に整っていません。そこで、篤志家による無利

子型／給付型奨学金を設立する動き（例：大阪の中～高校生を対象とした「梅が枝中央きずな基金」）をはじめ、大学や企業も独自の奨学金制度を充実させる取り組みを行っており、奨学金の多様化が進みつつあります。

に、子どもたちが安心・安全に過ごせるようなさまざまな取り組みの総称として「夕刻を支える場」があります。子どもがそこに通うことで保護者の夕刻も安心できる時間になれば、という思いも込め

られているそうです。さまざまな「選択肢」が地域にあり、それぞれがつながっていくことが地域ぐるみで子どもを支えることに向かっているのではないのでしょうか。

## 4. 国の施策どうなってるの？

国もただ手をこまねているわけではありません。2013年6月、「子どもの貧困対策の推進に関する法律」が成立、2014年1月施行されました。これは元々学生の声からスタートしたもので、子どもの貧困を個人の責任に押し付けず、子どもの権利が保証され、健やかに育つことができる環境を作っていく責任が国にもあることが謳われています。

続いて、2014年8月には「子供の貧困対策に関する大綱」が発表されました。**図表4**のように、教育支援、就労支援、学校を拠点した支援など対策事業のメニューが提示されていることを受け、自治体でも総合計画に反映させたり、対策計画の策定が準備され始めています<sup>7</sup>。

しかし、課題もいくつか指摘されています。

**問題点 1**：貧困率の削減数値目標がない（「改善する」のみ）。

**問題点 2**：保育・医療に触れていない。

**問題点 3**：主に中学生の高校進学を想定した内容で、そこに至るまでに蓄積される「不利」の根本的解消の視点が薄い

その後、2015年に4月に「生活困窮者自立支援制度」<sup>8</sup>がスタートし、**図表5**のような生活困窮家庭の自立に向けた支援プログラムが作られました。そして、同年6月には「すべての子どもの安心と希望の実現プロジェクト」が策定され、主に「ひとり親家庭・多子世帯等自立応援プロジェクト」と「児童虐待防止対策強化プロジェクト」が打ち出されています。今後これらの制度やプロジェクトがどのように実践につながっていくのか、注視していきたいところです。

**【図表4】子どもの貧困対策事業の一例**

1. 教育支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>生活困窮者世帯の子ども・ひとり親世帯の子どもへの学習支援</li> <li>高校生等奨学給付金制度</li> <li>スクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラー配備 など</li> </ul>
2. 経済支援	母子父子寡婦対象の福祉資金の貸付 など
3. 生活支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>ひとり親家庭に対する総合的な支援</li> <li>待機児童解消加速プランの推進</li> <li>支援が必要な児童等の予防・早期発見に向けた取り組み強化</li> <li>社会的養護施設の体制整備 など</li> </ul>
4. 就労支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>ひとり親家庭の相談窓口のワンストップ化</li> <li>ひとり親家庭の親に対する就業支援、学び直し支援(高認)、在宅就業支援 など</li> </ul>

(出典) 出典 「子どもの未来応援プロジェクト」 ホームページより  
<http://www.kodomohinkon.go.jp/>



**【図表5】生活困窮者自立支援制度の例**

1. 自立相談支援事業	
2. 住居確保給付金（有期）～居住確保支援	
-----	
3. 就労準備支援事業	～就労支援
4. 一時生活支援事業	～緊急的な支援
5. 家計相談支援事業	～家計再建支援
6. 学習支援事業	～子ども・若者への支援

[注] 1と2はすべての自治体での必須事業。3-6は任意事業で、自治体が国に申請して行われる。

<sup>7</sup> 公益財団法人「子どもの貧困対策センター あすのば」と末富芳・日本大学准教授が、2015年12月に各都道府県別の策定状況をまとめて報告している。  
 URL: [http://usnova.sakura.ne.jp/report\\_20151208.pdf](http://usnova.sakura.ne.jp/report_20151208.pdf) ※右側のQRコードを読み取ることでもご覧いただけます。

<sup>8</sup> 既存の制度では十分に対応できなかった生活保護に至る前の段階の生活困窮者に対し、「自立の促進」を図ることを目的として、平成27年4月に施行。これにより福祉事務所を設置する自治体は、生活困窮者がワンストップで相談できる窓口の創設など、自立相談支援事業を行っている。



貧困問題と関係あるの？

## 第2章

# 「学習支援」ってなに？

日本における「子どもの貧困」が今どうなっているのかを見てきました。経済的な困窮の問題だけでなく、それをきっかけとしてさまざまな困難が複合的に絡まり合っている状況に対し、地域でできることはどのようなことがあるのでしょうか？

次に、さまざまな取り組みの中の一つである「学習支援」について焦点を当てて考えてみましょう。貧困対策と学習支援の関係をイメージするとともに、地域住民が地域の子どもたちを対象とした学習支援を行う意義について考えてみませんか？

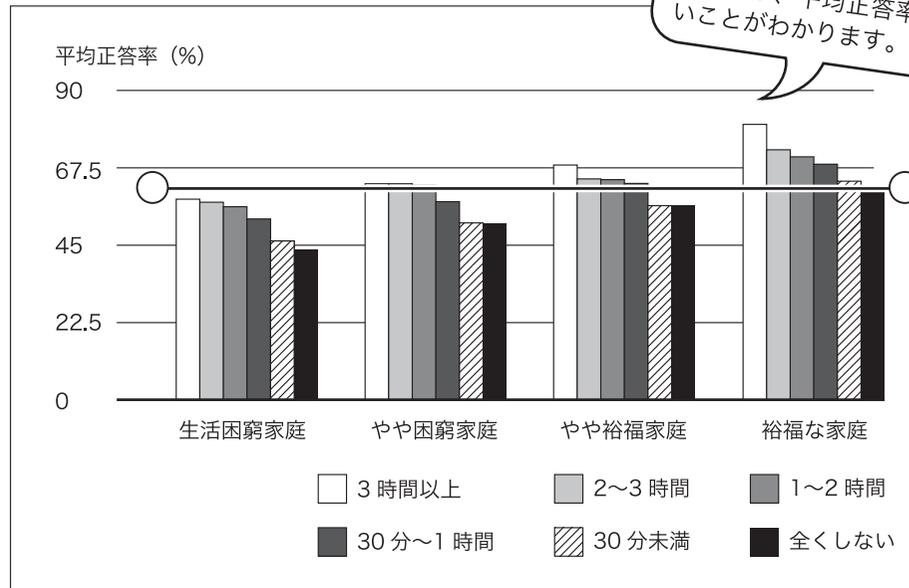
# 1. なぜ「子どもの貧困対策」に「学習支援」なのか

子どもの貧困対策として多様な取り組みがある中で、近年「学習支援」が多く行われるようになっていきます。設備に多くを必要としない立ち上げやすさや、学力向上や基礎習慣の定着など達成目標がわかりやすいこともあり、地域住民や教員 OB、大学生がボランティアで運営している事例が増えています。制度的に学習支援を後押ししようとする自治体も増えています。社会に居場所を見つけられない若者や子どもへの支援活動を展開する「NPO 法人さいたまユースサポートネット」が2015年に行った調査<sup>9</sup>によると、生活困窮家庭の子どもを対象とした学習支援を実施している、または実施を予定している自治体は52.5%に達し、自治体でも関心が高いことがうかがえます。

では、多様な支援メニューがある中でなぜ「学習支援」に注目がなされるのでしょうか。図表6は、「所得」と「学力」の関係性に注目した研究<sup>10</sup>です。2つの○（所得の少ない家庭で最も勉強した子と、所得が多い家庭で全く勉強しなかった子）を比べた時、前者のほうが平均正答率が低い結果となりました。誤解を恐れずにいえば、「本人の努力（学習時間）」よりも「生まれた家庭環境の違い（所得水準）」のほうが学力（平均正答率）に直結しているということでもあります。

その理由については諸説ありますが、生活困窮家庭は十分な資金的余裕がなく、塾や習いごとなど「子どもの学習」にお金をかけられないため、という可能性があります。いわば「機会の不平等」ともいえるでしょう。そのような現状をなんとかしたいと思ったボランティアや自治体が、無料または低料金での「学習支援」を立ち上げた動機ともなっているのかもしれません。

【図表6】家庭所得別学習時間と平均正答率の関係(小6国語)



裕福な家庭の■と、生活困窮家庭の□では、裕福な家庭の方が、平均正答率が高いことがわかります。

memo

<sup>9</sup> NPO 法人さいたまユースサポートネット (2016) 「生活困窮者自立支援法に基づく学習支援事業に関する調査」より

<sup>10</sup> 耳塚寛明 (2015) 「平成 25 年度全国学力・学習状況調査 (きめ細かい調査) の結果を活用した学力に影響を与える要因分析に関する調査研究 (文部科学省委託研究)」より

## 2. 「勉強を教える」その前に私達が考えておきたいことは？

しかし、勉強を教えれば「課題」は解決するわけではありません。そもそも、子ども自身が学習に向かう前に考えておきたいことがいくつかあります。

### 1. 時代の変化を理解する

時代が変われば、家庭環境も社会環境も変化します。学習習慣もしつけも、これまでは「家庭」で当たり前のように担ってきたものと思われていますが、現代の家庭にはその余裕がなくなってきました。図表7にあるように、家庭にできることは限られている時代であることを認識する必要があります。

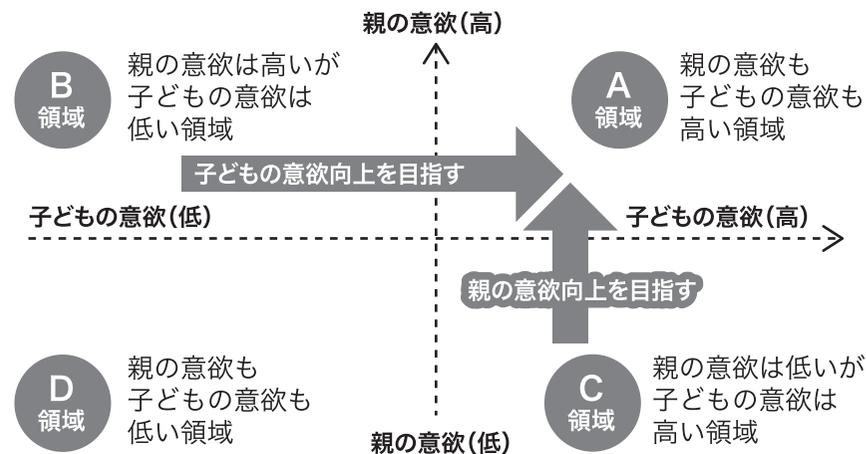
【図表7】今と昔はこんなにちがう!? 家庭環境

	昔	現代
家族形態	サザエさんの家族形態 (大家族のイメージ)	クレヨンしんちゃんの家族形態 (核家族が一般的)
親戚づきあい	煩わしいがここぞというときには頼れる存在 親戚に「フーテンの寅さん」のような大人が1人はいたはず!?	親戚づきあいも希薄化 震災時にはよく「遠くの親戚より近くの他人」と言われる
就労形態	ひとりが多くの収入を得て、もうひとりが家事・育児を担う分業制。高度経済成長もあり、年功序列・終身雇用制度が収入の見通しを立てやすくしていた。	共働きが一般的。男女の隔てなく働きたいという価値観が一般化する一方で、終身雇用制度の崩壊・非正規雇用の増大もあり、安定した収入のためにやむなく働く人も。
コミュニティ	誰かがいるため、近所の目は行き届いていた。銭湯など井戸端会議がなされる場所が多くあり、噂話もすぐに広まっていた	自治会加入率の低下など、希薄化。ご近所話はなるべく遠くで。知らない人から声かけられたら逃げなさいと教えられることも

### 2. 学習に「意味」を見出す

子どもが勉強に取り組むかどうかは、子ども本人の意欲だけでなく、親の意欲も影響します。公益財団法人チャンス・フォー・チルドレンは、企業からの寄付を原資に作った無料教育クーポン（バウチャー）を経済的困窮家庭に届ける活動を通して、親と子の意欲の関係について図表8のようにまとめています<sup>11</sup>。すべての家庭が、教育・学習に対して親子ともに意欲の高い「A領域」にいるわけではありません。B領域の家庭がA領域に向かうには、また、C領域の家庭がA領域に向かうにはどのような仕掛けが必要でしょうか。学習の「場」を準備する上で、事前に考えておきたいものです。

【図表8】貧困家庭の親と子の意欲のマトリクス



※子どもの意欲＝学習意欲・進学意欲

※親の意欲が低い状況の例：教育への関心が低い／病気等の理由で子どもに関心が向けられない等  
出典 公益財団法人チャンス・フォー・チルドレン「年次報告書 2013」の図を一部加筆

<sup>11</sup> バウチャーが特に有効なのはA領域の家庭であり、B→Aの家庭にも効果がある一方で、C→Aの家庭には十分に届いていないことが報告書で指摘されています。つまり、最終的な意思決定は親が行うため、子どもがどんなに意欲があっても親の意欲を高めないと支援プログラムにたどり着けないことが課題であるといえます。

### 3. 地域の「大人」だからこそできる可能性と限界

「勉強」と聞くとイヤだなあと思った記憶が、子どもの頃は誰しもがあったはず。試験前など「仕方なく」やることもあるかもしれませんが、「楽しい」と思ったことには熱中して取り組んだことがあるでしょう。学校で習ったこと、家族に教えてもらったこと、たまたま通りすがり見聞きした出来事・・・学習へのモチベーション（動機づけ）との出会いはどこにあるかわかりません。学習へのモチベーションをくすぐることは、地域の大人だからこそできる可能性でもあります。例えば、「人間関係」からモチベーションが生まれるかもしれません。いろんな仕事をしている大人や、ちょっと背伸びしたら届きそうなお兄さん・お姉さんとの出会いを通して、「こんな人になりたい!」、「がんばろう!」という新しい目標が作られることもあります。そのような意欲や人間関係があつて初めて「学習」に向かうことができるのではないのでしょうか。

その一方で、地域にできることにも限界があることを知っておく必要があります。例えば、例えば、週3時間の学習支援を週1日提供したとしても、その子にとっては1週間の時間のわずか2%にしかありません。つまり、子どもにとって「日常」ではないのです。だからこそ考えるべきは、「日常に繋がれることは？」であったり、「非日常だからこそできることは？」なのでしょう。

## 3. 学習支援を通して、何を願っているのだろうか？

どのような家庭環境に生まれても、子どもがのびのびと育ち、「自立—自分で自分の生活を切り拓いていける力をつけること—」を応援したいと願っているでしょう。では、自立を育むためには、子どもたちにどのような経験が必要でしょうか？

親戚づきあいが希薄と言われる昨今の家庭の子どもにとって、親や学校の先生以外の大人が身近にいないことが多いです。経験や考えなど多様な「履歴を」もつ大人と出会いは、子どもたちの柔軟な視点や多様な価値観の獲得につながるでしょう。異なる年齢・異なる地域の人と「ナナメの関係」を育むことは、地域が行う学習支援の場だからこそできる可能性があります。

例えば、放課後を1人で過ごすことの多い子にとって、安心して過ごせる時間・一人ぼっちではない夕食・宿題を見てくれる大人の存在があることは心の支えになります。「だめなことはダメ」と教えてくれる人がいて、「ありがとう」と自分のしたことでも喜んでくれる人がいる、という心地よい経験を得ることができれば、自分が受けた「ありがとう」を次の子に伝えていく「恩送り」が生まれるかもしれません。学習支援など「子どもを支える場」にはそのような可能性があります。

「学習支援」はそのためのひとつの手段です。私たちはどのような願いをもって活動しようとしているのか、考えるところから始めてみませんか？

# 子どもの「困りごと」を考えよう

貧困とは「貧」しくて「困」っている、と書きます。子どもの貧困とは、低所得な家庭環境をきっかけに、生活する上で「困った」状態になりやすい社会問題です。言い換えれば、子どもが「何に困っているのか」をきちんと見つめることが大事だともいえます。

子どもは自分の置かれている状況や必要なことを自分の言葉で適切に表現できないことが多いです。「困った子」は「困っている子」として捉え、その子が本当は何を訴えたいのかを考えてみませんか？

1. 子どもが学校を「欠席」する時、どんな理由があると考えられるでしょうか？ ひとまず価値判断はさておき、質より量！ 思いつく理由を考えてみましょう。  
(例：病気、不登校、家族旅行、ゲームの発売日・・・)

2. それらの理由は、子どもにとって「安全・安心な欠席」でしょうか？子どもの教育を受ける権利が保障されているでしょうか？ その状態は子供の成長・発達の機会を保障できているでしょうか？ 一つひとつ考えてみましょう。

同じ欠席でも家庭や子どもによって「その状態の意味」が異なることを理解しましょう！



## コラム：シングルマザーの困りごと

「シングルマザー」という言葉を日常的に耳にするようになりました。図表1にもあったように、貧困率が50%を超えているひとり親家庭の中でも、シングルマザー家庭の事情は特に厳しいとされています。その一方で、「離婚は自分たちの勝手なのに、なぜ社会的支援が必要なのだ」という自己責任論も飛び交うなど、「困りごと」が社会全体に共有されていないとも言えるでしょう。

【図表9】シングルマザーの現状<sup>12</sup>

	母子世帯	父子世帯	
世帯数（推計値）	123.8 万世帯	22.3 万世帯	
本人名義の持ち家率	11.2%	40.3%	
就業率	80.6%	91.3%	
	うち、正職員	39.4%	67.2%
	うち、パート	47.4%	8.0%
年間平均就労収入	181 万円	360 万円	

シングルマザー問題を考える上で、「雇用問題」そして「ジェンダー格差」の視点を持ち合わせる必要があります。また、同じシングルマザーでも婚姻歴の有無で所得控除額の違いが発生するなどの税法上の不利がある<sup>13</sup>など、「課題の見える化」が必要です。

しかし、最たる困りごとは「ほんの些細なことを相談できる相手がいないこと」だそうです。日々の小さな困りごとが蓄積していくことのしんどさは想像しがたいものです。家族に相談できなくても、気軽に聞ける人が地域の身近なところにいれば――。地域に求められる役割のひとつかもしれません。

<sup>12</sup> 厚生労働省「平成23年度全国母子世帯等調査」より

<sup>13</sup> 当事者が中心となり、婚姻歴の有無を問わず同一の対応となる「みなし寡婦控除」の導入が自治体によってはすすめられています。

学習支援を立ち上げるその前に！

## 第3章

# はじめに考えておきたい 7つのポイント

子どもの貧困問題に対して、「学習支援」の可能性について考えてきました。ここでは、実際に学習支援の場づくりを始めようと考えている人向けに、立ち上げるまでに考えておきたいポイントを7つにまとめました。

それぞれのポイントで、解説とワークを作っています。書き込んで使って下さい。また、グループのみなさんと一緒に作業をするとより効果的ですので、コピーして使っていただくとよいでしょう。枠が足りなければ、白紙を別に準備してそちらに書いてみてください。



## ポイント② 地域の「今」を知ろう

活動する「わたしたち」の次に、活動する「地域」について考えてみましょう。活動地域はどんな場所でしょうか？ 資料を調べたり、実際に歩き回ったり、話を聞いたりしながら、地域を「再発見」してみましょう。きっといろんな「資源」があるはず！ 洗い出してみましょう。

### 1. 地域のデータを調べよう

項目	データ・数値（おおよそでOK）
地域人口	人（高齢化率 %）
小学校	学校の数： 市立 校 / 私立 校 小学生の人数：低学年 人 / 高学年 人
中学校	学校の数： 市立 校 / 私立 校 中学生の人数： 人
高校	学校の数： 市立 校 / 私立 校 高校生の人数： 人（うち、区域内で通っている子：約 %）
生活保護率	
就学援助率	
高校中退率	
主な危険箇所	

<1.-3.共通>

＊範囲は、市全域でも居住エリア（小学校区や中学校区）でもかまいません。なるべく自分たちの活動エリアに近いものを考えると良いでしょう。

＊統計情報は市のホームページなどで公開されているものもあれば、ないものもあります。なかったとしても、すぐにあきらめずに行政や地域の人に「尋ねて」みましょう。

### 2. 地域にはどんな「拠点」があるのだろうか？

地域には子どもたちが集えるさまざまな「拠点」があります。市民センターや学校などの公共施設だけでなく自治会館のような地域施設、商業施設、寺や神社、中には私塾などで自宅を「開放」している人がいるかもしれません。

名称	どこにある？	子どもの行きやすさは？

### 3. 地域にはどんな「人」がいるのだろうか？

地域には住民の困りごとに対して取り組む人たちがたくさんいます。自治会や民生児童委員などの地域の役職の人もいれば、さまざまなテーマで活動するボランティア活動グループ、子ども110番、学校の先生OB、専門家…など。子どもや家庭の支援に関わるかもしれない「人」を探してみましょう。

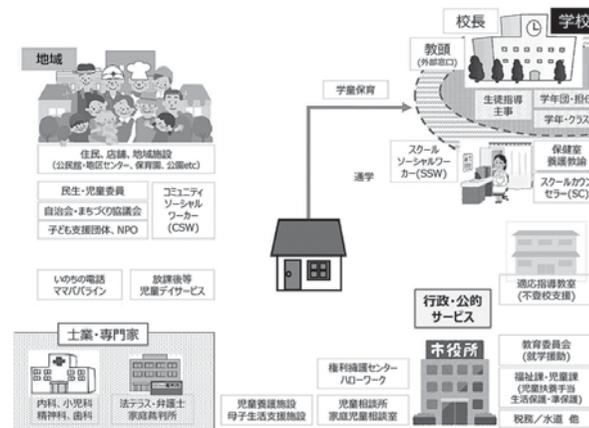
# ポイント③ 地域を「見える化」しよう

活動する地域の特徴を確認したら、その特徴を「見える化」しましょう。どこにどのような「資源」がありますか？ それらはどのような関係があるのでしょうか？ 同じ資源でも人によって見方が異なることもあります。資源を「見える化」し、メンバー同士で”ちがいを”話し合ってみましょう！

## 1. 社会資源マップを書こう！

地域にはどのような人たちや組織があるのか、子どもを中心に置いて、さまざまな地域資源の関係性をまとめてみましょう。

【地域資源マップの例】



## 2. 活動する地域の「地図」を書こう！

道路や線路、川や橋なども子どもの行動範囲を考える上で重要な視点になります。前ページで書き出した「拠点」や「人」の情報もあわせて、地域の地図を作りましょう。

\*別の紙でワークする場合は、なるべく大きな紙に書くことをおすすめします。

【地図に書いて欲しいもの】  
駅・道路・線路・川・橋・学校・公共施設・公園・コンビニ等

## ポイント④ 地域にどんな子がいるかを想像してみよう

地域資源が見える化できたら、地域にいる「子ども」について考えましょう。その地域にはいろいろな「気になる子」がいるかと思います。個人的な特徴もあれば地域的な特徴もあるでしょう。その子の「背景」を見通すとともに、その子が将来的にどうなってほしいのか、を考えてみましょう。

### 1. わたしたちが支援したい子どもたちとは、どんな子ですか？

わたしたちの活動には、特にどういう子に来てほしいですか？

その子の「特徴」を思い描いてみましょう。年齢・性別・家庭環境・性格や心情・その子をめぐるエピソード…など、その子の「背景」を右の図の●印のついた吹き出しに書き込んでみてください。

\*具体的に「この子！」のイメージがあればより良いです。

### 2. その子たちがどんなふうになってほしいのでしょうか？

さまざまな経験を通して、子どもは成長するもの。○○を大切にできる人になってほしい、すぐに諦めない子になってほしい・・・などなど。その子たちがどんな子になってほしいと願っていますか？ 目標を考えて、右の図の▲印のついた点線吹き出しに書き込んでみてください。

### 3. そのためには、どんな体験や経験があるとよいのでしょうか？

子どもの「目標」は、いろいろな経験を積み重ねて少しずつ近づいていくもの。私たちが願う子どもたちの目標に向けて、どんな体験や経験があるといいのでしょうか？ 私たちにできる・できないは一旦置いておいて、こんなことがあればいいな、というアイデアを右の図の「体験・経験」欄に思いつくかぎり書いてみましょう。

●この子は・・・

▲この子は・・・

●この子は・・・

▲この子は・・・

●この子は・・・

▲この子は・・・

●この子は・・・

▲この子は・・・

体験・経験

## ポイント⑤ どういう「学習支援の場」があるといいかを考えよう

地域の子どもたちが「こうなってほしい!」という目標が描けたら、わたしたちが提供する「学習支援」についてイメージしてみましょう。その学習支援が行われている場はどんな雰囲気でしょうか? どんな声が飛び交っている場所でしょうか? イメージを書き出してみましょう。

### 1. 例えば、こんなことが起きたとき、どう声かけしますか?

実際の現場を想定して考えてみましょう。

- ①来て早々に「今日は勉強したくない!」と宣言されたとき
  
  
  
  
  
  
  
  
  
  
- ②みんなが勉強している中で、「遊ぼうよ!」と他の子に声かけしているとき
  
  
  
  
  
  
  
  
  
  
- ③「天気もいいし外に遊びに行こうよ!」と学習の場から離れようとするとき
  
  
  
  
  
  
  
  
  
  
- ④宿題が出ているのに「今日はないよ」とウソをつかれたとき
  
  
  
  
  
  
  
  
  
  
- ⑤登録制の活動の中で、突然知らない子を連れてきたとき

※他にも、起こりうるかもしれない状況をあげてみましょう。

### 2. 学習支援の場で「大切にしたい価値」を考えましょう

学習支援の場で多様に発生する出来事に対して、わたしたちは「判断」をしないといけません。そのときの根拠となるものが「価値」です。ページ左のような事例を参考に、それぞれの声かけを通してみなさんが大切にしたいと思っている価値を考えてみましょう。

### 3. わたしたちの「大切にしたい価値」が実現するために

何が必要かを考えましょう。

<場の工夫、環境づくり>

<スタッフの心構え>



#### ポイント

ひとくちに「学習支援」といっても、本人や家族の「家庭環境」(p.5)や「意欲」(p.10)によって適切な方法は異なるでしょう。例えば、きちんと向き合っ  
て勉強を教えるような「塾型」や「家庭教師型」が良いのか、他者との関わり  
を大事にした対話を通した「居場所型」が良いのか— 大きく方向性が変わ  
ります。両方をミックスするならば、矛盾のないようにするにはどうしたら  
よいのか、いろいろと考えてみましょう。

## ポイント⑥ わたしたちに「不足する資源」を考えよう

学習支援はすべてがわたしたちだけでできるわけではありません。「NPOは借り物競走が得意」というように、さまざまな人の助けをうまく借りながら取り組むことが大事です（“助けてコミュニケーション力”とも言います）。p.14で書いた「わたしたちを知ろう」で考えた内容を思い返しながら書いてみましょう。

### 1. わたしたちの「長所」をたくさんあげてみましょう

特技・専門・経験・性格・人脈・資産やツールの有無など、いろいろな視点から考えてみて下さい。

・	・
・	・
・	・
・	・
・	・
・	・

### 2. 逆に、わたしたちの「苦手」を思いつく限り書いてみましょう

特技・専門・経験・性格・人脈・資産やツールの有無など、いろいろな視点から考えてみて下さい。

・	・
・	・
・	・
・	・
・	・
・	・

### 3. どんな人のどのような力が得られると良いでしょうか？

わたしたちの「苦手」を補うために、どんな人のどのような力が得られると良いでしょうか？ p.16で考えた「社会資源マップ」を参考にして考えてみましょう。

### 4. 力を貸してくれた人にどのような「良いこと」があるでしょうか？

「3.」で考えた人の力を借りるとしたら、その人にとってどのような「良いこと」があるでしょうか？ テーマやわたしたちの思いに「共感」し、「自分ごと」に感じてもらえると協力してもらいやすくなります。その人の心を揺さぶる内容やメリットを考えてみましょう。

# ポイント⑦ 持続可能にするための方法を考えよう

学習支援を立ち上げたら、やはり「継続すること」は大事です。途中でやめてしまうと、そこに参加していた子どもの行き場所がなくなってしまうかもしれません。では、細々とであっても継続的に取り組むためにはどのようなことを考えればよいでしょうか。「マネジメント」についても考えましょう。

## 1. どれだけの費用がかかるかを考えよう

継続運営のためには、やはり「お金」のことから避けて通れません。ボランティア中心に回したり、会場を無償提供いただけたとしても、様々な費用がかかります。継続するために何が必要か、を細かく書き出してみましょう。

どんな項目？	具体的にどんなものを？	どれだけ？
人件費・交通費		円
会場費・水光熱費		円
消耗品費		円
教材費		円
印刷費		円
通信費		円
保険代		円
		円
	合計	円



ポイント

- ・日単位→週単位→月単位→活動全体、と広げて考えます。日々の活動資金は1回くらい必要か、から積み上げていきましょう。
- ・このうち、外部から「寄付」や「物資提供」、「ボランティア」が得られそうなものはありますか？ あれば、○をつけてみましょう。
- ・購入にも優先順位をつけましょう。喫緊に必要なものは下線を、急がないものは（ ）をつけましょう。

## 2. どうやって収入を得るかを考えよう

左の費用リストの中から寄付や物資提供で賄えるものを除くと、継続するのに必要な金額が見えてきます。この金額+αをどのように調達するかを考えましょう。

どんな項目？	具体的な目標イメージ	小計
参加費 <small>*利用する子どもから利用料をとる場合は書きます</small>		円
会費 <small>*応援メンバーがどれだけいますか？年間寄付のようなイメージです。</small>		円
寄付金 <small>*どんな人が応援してくれそうですか？支援者とのような出会える機会がありますか？</small>		円
助成金 <small>*行政や財団の支援が得られる場合は書いてください。ただし、確実性には疑問が付きまます。</small>		円
イベント収益 <small>*別の事業で稼いで学習支援に補填する方法も。ただし、本末転倒にならない程度に。</small>		円
その他		円
	合計	円

## 3. 危険予測をしよう

学習支援の場の大きな財産は「地域からの信用」です。しかし、わずかな事故やほころびから信用は一瞬のうちになくなってしまいます。そうならないためにも、どのようなリスクがあるかを書き出してみましょう。そして、そうならないために、どう対応するか考えましょう。



## コラム: ボランティアマネジメント

学習支援をはじめ、子どもを支える活動には「ボランティア」の存在なしでは行えないものです。しかし、ボランティアは「無償の労働者」では決してありません。最大の支援者であるはずのボランティアがそっぽを向いてしまうと、学習支援が継続できないだけでなく、悪い評判が地域に立ってしまうこともあります。ボランティアする側も受け入れる側も気持ちよく活動できるような関わり方を考える必要があります。

**図表10**は、日本ボランティアコーディネーター協会が出した「ボランティアの考え方」です。団体内でボランティアに対する認識を整理したうえで、「ボランティアがなぜこの活動に取り組もうと思ったのだろうか?」という気持ちに寄り添うことが、受け入れ側に求められる姿勢といえます。

### 【図表10】ボランティアとは (日本ボランティアコーディネーター協会「ボランティアコーディネーター基本指針」より)

1. ボランティアは、「市民社会」を構築する重要な担い手である
2.        "        自分の意志で始める
3.        "        自分の関心のある活動を自由に選べる
4.        "        活動に対して責任を持ち、その役割を果たす
5.        "        共感を活動のエネルギーにする
6.        "        金銭によらないやりがいと成果を求める
7.        "        活動を通して自らの新たな可能性を見出す
8.        "        活動を通して異なる社会の文化を理解する
9.        "        活動を通して新しい視点や提案を示し行動する
10.       "        安価な労働力ではなく、無限の創造力である

では、みなさんの団体にはボランティアさんが「いきいきと活動できる基盤」がどれだけあるのでしょうか？ 右の「ボランティアがいきいきと活動するための条件シート」を見て、みなさんの団体の実際を振り返ってみましょう。

### ボランティアがいきいきと活動するための条件(チェックシート)

- 団体の中でボランティアの参加を重視する風土がある
- ボランティアが参加できる場を整理して、わかりやすく示している
- ボランティアの活動を推進する担当者がある
- ボランティアのことを考えられるような余裕がある
- オリエンテーションなど、ボランティア受入時の仕組みを作っている
- 交通費など活動にかかる費用について整理できている
- ボランティアの役割や位置づけを明確にしている
- ボランティアの多様な関わり方を提案している
- ボランティアが参加できる会議や交流の機会を持っている
- 研修制度など、ボランティアがステップアップする機会を持っている
- ボランティアが意思決定に関わることが出来る仕組みを作っている
- ボランティアに活動があっていないときに、別の活動を紹介するなど柔軟に対応できている
- 事故や危険などを想定して、できるだけ対策をねっている

(出典) 日本 NPO センター「NPO リーダーのための 15 の力 WORKBOOK」 p.73

一人ひとりの持ち味を発揮して組織の中でいきいきと活動することができ、結果として、活動の目標達成に大きな貢献をしてくれるだけでなく、活動の可能性を広げてくれる存在が「ボランティア」です。ボランティアが力を十分に発揮できるような組織体制についても、考えてみませんか？





# コラム：まなびあの取り組み

私たちが「まなびあ」を立ち上げたきっかけは、あるシングルマザー家庭の、不登校経験者が発した「失われた期間の勉強を取り戻したい」という声からでした。初めは緊張していた子たちも、スタッフと顔なじみになって安心したのか、何かしらの「困りごと」が聞こえて来るようになりました。

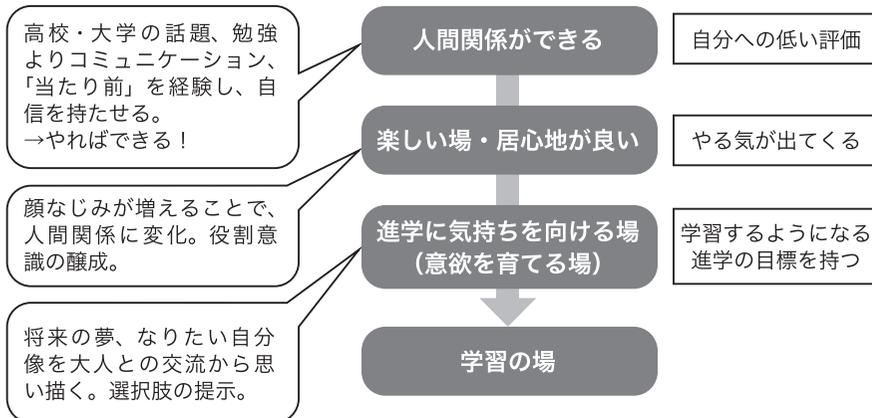
例えば、

- 経済的困窮 → 学校外教育や文化資本の差が生まれている
- 両親共働き、ご近所・親戚づきあいの低下 → 社会的孤立
- ひとりきょうだい、異世代交流の機会の減少 → 関係性構築の課題
- ネグレクト状態にある子、セルフネグレクト → 自尊感情の低下

などです。そのような中で、「まなびあ」の取り組みの柱を次のようにまとめました。

### 【大切にしたい価値】

- ・ありのままを受け止めてくれる、押し付けや強制・排除のない場を通して子どもたちの「心身の安全・安心」を確保する
- ・小さな成功体験が多く生まれ、子どもにとって日常とは異なる新しい関係が生まれる場を通して「自己肯定感」を獲得する
- ・身近な大人との出会いを通して、子どもが目標や夢を描く力をつけるとともに、困ったときに助けてくれる人が近くにいるという安心感を生み出す
- ・「豊かな自己選択ができる」機会を作ることで、不足しがちな文化的資源を補う地域づくりに貢献する



### まなびあ基礎データ

内 容：学習支援、あそび支援  
 実 施 日：毎週水曜日・金曜日 15:30～18:30 いつ来てもいつ帰ってもOK  
 ＊祝日や長期休暇中は 10:00～12:00  
 場 所：さんだじばやん倶楽部（三田小学校区県民交流広場）  
 ＊三田市三田町 21-12  
 利 用 者：小学生～高卒生まで、約 15 人（参加費：無料）  
 スタッフ：事務局 1 人、ボランティア 15 人（大学生、地域の若者など）  
 総 予 算：年間約 150 万円  
 （サタデースクール込。初動期は助成金を、安定してからは寄付を中心に運営）  
 U R L：https://www.facebook.com/sanda.manavia/（Facebook）



今、何が起きているの？

学習支援ってなに？

はじめて考えておきたい7つのポイント

おわりに

## おわりに ～「関係性の貧困を断つ」こと

子どもは自分の抱えている悩みや課題を上手に「ことば」で説明できないものです。私たちに見える「行動」や「発言」が、そのまま本人の「思い」を表していないことはよくあります。周りから見える「困った子」=自分の思いをうまく表現できずにムズムズした「困っている子」、だと考えれば、彼らが発するわずかな「つぶやき」にこそホンネのメッセージが隠されている可能性があるともいえるでしょう。つぶやきに耳を傾け丁寧に拾いあげていく、そして、ある「ひとりの困りごと」を個人の問題にせず、さまざまな人たちと力を合わせながら社会に「見える化」することこそが、学習支援をはじめとした「地域に開かれた場」にできることではないかと考えています。

私たちが取り組んできた三田まちの寺子屋「まなびあ」の経験を基に、これから学習支援を立ち上げたいと考えている人に寄り添える冊子を目指して作りました。「“学ぶ”を支える場づくり」というタイトルには、学ぶこと・学習支援をすることそのものを目的にするのではなく、子どもたちの成長を願う地域の大人と子どもとの関わりが生まれる「場」にこそ、子ども自身の気づきや成長のきっかけが秘められていると経験的に感じた思いが込められています。多様なスタイルの学習支援の場があり、それぞれの経験を共有できる「学習支援団体同士のゆるやかなつながり」を通して、学習支援団体自身も気づきと成長を得られることと思っています。

\*vol.2 では、実際に立ち上げた後のマネジメントに特化した内容で作成します。子どもを見る視点、ボランティアをはじめとしたスタッフへの視点、そして組織の継続的運営を目指す視点、について考えます。

\*みなさんのもとに「出張」します！！

本冊子を使ってチームで検討をしたい！ 立ち上げ前後に伴走してくれるアドバイザーがほしい！ とお考えのみなさまのもとに、当団体の相談員が出張します。詳しくはお問い合わせ下さい。







本冊子についてのお問い合わせ

NPO法人 場とつながりの研究センター  
〒669-1533 兵庫県三田市三田町 29-14  
電話079-553-2521 FAX 079-553-2522  
Email :info@batotsunagari.net  
URL: <http://batotsunagari.net>



本冊子は、公益財団法人ベネッセこども基金「平成27年度 経済的困難を抱える子どもたちの学習支援活動助成」を受け、作成しました。